

潜水死亡事故の原因

原因	男性		女性		合計	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
潜水の途中で一人になった	36	(35.3%)	15	(50.0%)	51	(38.6%)
一人で潜水を開始した	39	(38.2%)	2	(6.7%)	41	(31.1%)
レギュレーターから空気が来ない	20	(19.6%)	1	(3.3%)	21	(15.9%)
流れ	12	(11.8%)	6	(20.0%)	18	(13.6%)
パニック	10	(9.8%)	2	(6.7%)	12	(9.1%)
器材の不調	10	(9.8%)	2	(6.7%)	12	(9.1%)
原因がまったくわからない	7	(5.9%)	3	(10.0%)	10	(7.6%)
アルコール	6	(2.9%)	0		6	(4.5%)
波	3	(2.9%)	1	(3.3%)	4	(3.0%)
減圧障害	2	(2.0%)	1	(3.3%)	3	(2.3%)
気管支喘息	2	(2.0%)	0		2	(1.5%)
脳出血	2	(2.0%)	0		2	(1.5%)
窒素酔い	1	(1.0%)	1	(3.3%)	2	(1.5%)
ボートとの接触	0		2	(6.7%)	2	(1.5%)
心筋梗塞	1	(1.0%)	0		1	(0.8%)
肺の圧外傷	1	(1.0%)	0		1	(0.8%)

●全死亡例132名に対する割合

潜水死亡の原因は何か？

潜水で死亡した日本人ダイバー132名の原因です。(潜水中の死亡は広い意味ではすべて溺死(水死)なので、溺死という分類は使っていません)。ここで最も重要なのは、志望した約40%のダイバーが、最初はバディといっしょに潜水していたのに、途中でそれを解消、またははぐれてその後死亡したということです。それから、約70%(原因の第1位と2位の合計)のダイバーが、水中でひとりのときに死んでいるということです。単独潜水はいけないのは常識ですが、死亡者の大多数はひとりのときに死んでいるので、もしひとりで潜っていなかったら、器材のトラブルも発作的な病気も、バディに助けてもらえたのかもしてません。

潜水死亡事故の原因の解釈について

死亡原因を明確にするときに重要なのは、直接死因（病気や身体状況など）、その死因を招いた原因、その原因を招いた状況（器材トラブルなど）を関連づけて検討することである。特に、ダイビングの死亡事故では、直接死因より、それを招いた状況を明確にしたほうが、次世代に教訓を残すことができる。

当調査では、溺水という分類を使用していない。溺水を「気道や肺に液体が入り、呼吸（酸素・二酸化炭素のガス交換）ができなくなったことによって生じた窒息の一種」、溺死を「溺水による死亡」と定義するならば、ダイビング中、死を招くトラブルが発生すると、結果的に溺死することが多い。そのため、本調査のような事故原因を検討する際、事故者の検死（医師が書く死体検案書）結果に挙げられる溺水を含めてしてしまうと、潜水死亡事故の死因第1位は、溺水となってしまう。しかし、溺水を、潜水死亡事故の最大の原因として終わらせてしまえば、溺死を招いた原因が明確にならず、今後の事故対策につながらない。よってここでは、結果として起こってしまった「溺水」は項目に挙げず、溺水を招いた状況について検討した。

尚、当調査では、死亡時、バディやインストラクターが隣に付き添っていなかったケースは、すべて「潜水の途中で一人になった」または「一人で潜水を開始した」に含めている（両者ともいわゆる単独潜水）。事故者を独りきりにさせなければ救い得た可能性がある事例はどちらかにカウントされている。他の統計報告では、事故者を水中で見失い、その後、呼吸をしていない状況で発見されたケースは、単独潜水とされていないことがある。また、そのような水中口スしたケースでも、医師による検死の結果、肺に海水が入っている場合は、溺水とされていることもある。

さらには、溺水は、意識がある状態で（生きているときに）、肺に液体を吸い込んだと考えるのが一般的のようだが、実際に亡くなった方の肺の中にある液体が、生前、呼吸によって吸い込んだものか、自然流入したものかは、必ずしも明確になるわけではない。潜水死亡事故は、水泳の事故とは違い、事故者を水中から引き上げることがあるため、気道が開いていれば、浮上時、肺に水（海水やプランクトンなど）が入る可能性がある。よって、溺水と検案されていても、必ずしも、生前、海水を吸引しているとは限らない（本来の溺水ではない可能性がある）。